

大学図書館問題研究会 京都

京都市左京区北白川追分町 京都大学数理解析研究所図書室 (提筆宛先付)

TEL 075-753-7223

書庫問題の現状と対策

京都学園大学図書館 大館和郎

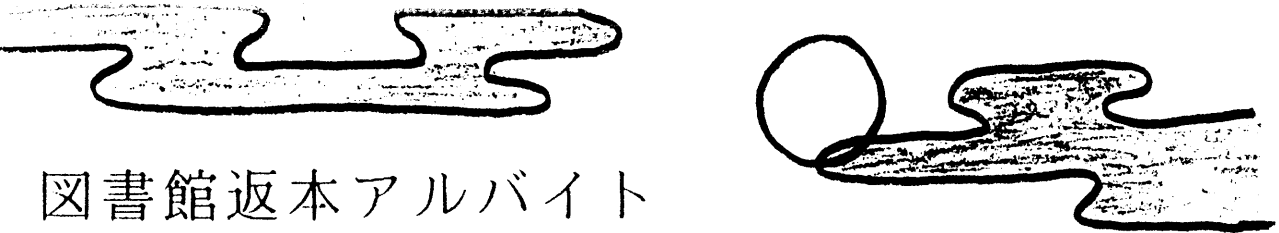
『アエラ』2月11日号に大学図書館の書庫の悲惨な状況についての記事が載っていて、読むと身につまされるものがあった。本学の図書館においても事情は同じである。すでに書架は満杯になり、あふれでた本は床積みされ、会議室や製本室も書庫化しつつある。今年の3月の棚卸しのときは段ボール20箱ほどに本をつめた。それでも本は毎年1万冊前後入ってくるからいたちごっこだ。書架がつまってくると、整理した本を入れるスペースをつくるために、数段にもわたって周辺の本を移動させるといったことに労力をつかうことが多くなった。整理する前の本を仮置きするスペースが足りず、あちこちに分散して置くため行方不明になりやすい。開架図書は新鮮に保つ必要がある。そこで古い本を書庫に入れようとするのだが、書庫のどの分野の書棚が一杯かわかっているのに、この分野はやめておこうとあきらめることがある。一体こうなることは予想できなかったのか。

10年前、京都産業大学図書館の方が館報に連載している図書館めぐりの記事の取材のために来られた。そのときの記事の一部を引用すると「・・・ちなみにこの新図書館の収容冊数能力は最初にも記した通り16万冊である。そして現在の蔵書冊数6万冊、年間の増加冊数5千冊。仮にこの調子で増えていけば、今後20年間は大丈夫ということになるが、実際はもっと早い時期に満杯になるであろう。・・・」まさにそのとうりになった。この間、大学は単学部から3学部になったうえ、女子短大が併設され年間増加冊数が2倍になったからである。現在の蔵書冊数21万冊、年間増加冊数1万冊。2年前に書庫の増築計画がたてられた。鉄筋コンクリート3階建(延面積900㎡、収容冊数30万冊)1993年8月着工、1994年6月完成予定である。それまでの間、業務をまひさせずに

なんとかもたさなければならぬ。小手先のきりぬけ策も出つくしたあげく、資料の廃棄も検討すべきではないかと思うようになった。

今年の図書館雑誌6月号では、《本の行方を追う 除籍・廃棄・共同保管・リサイクル》と題した特集のもとで、国立国会図書館が実施した「廃棄についてのアンケート調査」の結果が出ていた。それによると公共図書館では100%廃棄しているのに対し、大学図書館では33%の図書館しか廃棄していない。廃棄の方法をみると、大学図書館では業者への払出が一番多く、他の図書館に提供、裁断・溶解というのもある。大学図書館にそれだけ保存価値の高い資料が多いということなのだろうが、すべての資料を保存しなければいけないのだろうか。もちろん消耗品として受け入れた資料の中には廃棄したものもある。しかし備品扱いの資料の中にも時と共に価値のうすれてゆくものがあると思う。反対に時と共に価値の高まってゆく資料もある。ジャーナリスティックな資料や風俗資料は情報の新鮮度という観点からは時とともに価値がうすれてゆくが、文化史的な観点からは価値が高まってゆくかもしれない。そうすると1つの資料が観点を定めることによって価値が高くなったり低くなったりすることになる。この観点を収集方針といいかえてもいいだろう。こうなると単に廃棄といった面だけで考えるわけにはいなくなる。すなわち個別館レベルでは収集-保存-廃棄というサイクルの中でスペースを有効に活用しなければならないわけだし、図書館ネットワークレベルでは寄贈-受贈によるリサイクル、分担収集、共同保存による協力関係をつくらなければならない。また資料のマイクロ化、電子ブック等によるスペースの節約も考えられる。以上いわゆる書庫問題への対策のアウトラインをえがいてみたのだが、もはや書庫問題という枠からはみ出してしまった。

現場にたちかえてみれば、一個人の考えだけでどうなるわけでもない。図書委員会あるいはしかるべき意志決定機関で合意をえて明確な方針・基準・規程がつけられてはじめて実行できるのだが、まだ検討されるまでにはいたっていない。



図書館返本アルバイト

京都橘女子大学図書館 小林倫道

本学図書館では、昨年度より在学生のアルバイトを導入して返本作業を行なっています。今日は学生の身になってその苦勞を紹介したいと思います。

一昨年度の末「業務増大への対策」という大義名分のもと、返本要員として学生アルバイトの予算要求をしたところ、休校期を除く月～金曜日、毎日6人ずつ3時～4時の1時間という条件で獲得できた（土曜も要求したが没）。時給は650円（学内均一料金）、1週間でのべ30人（時間）ですが、「原則として週に2回以上来れる人」（年度更新）としてあるので面子としては大体15人位。学科回生は特に問いませんが、「図書館司書課程を受講しているか、する予定の人が望ましい」と一筆入れてあります。作業は返本の他、時間が余れば図書装備などの仕事もやってもらっています。アルバイト導入までは職員6人が朝一番に総出でやっていました。そのころは平均して1時間以上は毎日返本に費やしていたと思います。

ここで本学図書館の「環境」に話を移す。色んな方々に見学に来て頂いて「本当にきれいで素晴らしい図書館ですね」と時にお褒めを頂くわが図書館（まだ新しいからきれいなのは当たり前じゃ）。しかしこれほど配架が複雑な図書館もなかなか無いのでは。

資料は全面開架が原則（1階のAVセンターを除く）。【2階】にカウンターと参考図書、新着雑誌。【3階】が本学図書館の白眉。文庫・新書コーナーに始まり、ロレンス文庫（D.H.ロレンスの関連コレクション）、指定図書コーナー、女性学コーナー、大型図書コーナー、書道書コーナーの別置図書群に、0～1の一般図書が所狭しと並ぶ。仕上げは雑誌のバックナンバーでももちろん全冊開架。配列は製本、バラを分けずにタイトルの50音順（洋はABC順）。「～大学国文学研究」や「月刊～」のような紛らわしい雑誌のタイトルを「そら」で判断できるのは職員でも雑誌担当ぐらいだろう。3階を任せられるバイト学生は既に相当な「図書館通」である。【4階】【5階】が積層書庫となっていてそれぞれ2～7、8～9の一般図書が開架されている。

何ととっても問題の中心は2、3階の別置図書。ラベルの色や「禁帯ラベル」で配架場所がパッと判断できるものもあるにはあるが。

【曲者①】 書道書はラベルの色分けが一切なく、「728」という分類番号を常に念頭において返本しなくてはならない。それでいて「728」以外の書道書も若干あるから始末が悪い。文庫・新書にも目印がなく、「講談社現代新書」

などがよく一般図書に混入する。

【曲者②】 ロレンス、女性学、書道書等と指定図書や禁帯マークが重複した場合どちらを優先したらよいか迷う（マニュアルはあるがなぜか間違いが後を絶たない）。

【曲者③】 女性学関係の雑誌は一般雑誌のバックナンバーから分離して女性学コーナーの末尾に配架され、またこれとは別に女性学関係のミニコミ誌だけ集めたコーナーもある。こういう類は「ほら、ここにあるからここ」としか説明のしようがない。

これらはほんの一例である。



このような有様であるから、実際学生に返本をさせてみると、果たして、規則が複雑すぎてとても飲み込めない様子がすぐ分かる。ある時など、雑誌「週刊朝日百科」のファイルが「ブリタニカ国際大百科事典」の横にくっついていたりして笑わせるが、これなどあまり考えすぎてパニック状態になったのであろう。加えて分類番号の小数や著者記号のアルファベットへの不慣れからくる単純ミスも結構多い。このへんまではまだ許せるが、古い本のラベルのかすれや、新旧の著者記号体系の混在が、細かい判断の連続でもある返本作業を一層混乱させている。これらの解消は、わかっているにもかかわらずできない課題のひとつになってしまっている。

それにつけても、「バイト用返本作業マニュアル」を作ってみると結構なボリュームになってしまったのには閉口した。それによくよく読み返してみると、規則の矛盾や例外がボウフラのように後から後からわいて出てくる。職員でさえ全貌をつかむのに苦勞するような配架が利用指導上トクなわけがない。

これらの複雑さには旧図書館（図書室に近かった）から引きずってきたものもあれば、新図書館に来た時わざわざ作ったものもある。どうやら、何でもかんでも特色を持たせて感覚的に別置図書を増やし過ぎたのが仇となったようだ。そこで昨年度末に、無法則に細分化していた参考図書コーナーを一元化し、かなりの文庫・新書を別置を解消して一般図書に編入した。それでも整理しきれないものがまだ沢山残っている。



問題は山ほど有るが、安い賃金で働く学生たちをなだめすかしながら、返本作業自体はおおむね順調に回転しているとしよう。最大の成果は、①以上のような本学図書館の欠点を浮き彫りにしてくれたこと、②一番頭の働く朝一のゴールデンタイムに職員が肉体労働から解放されたこと、③装備等の単純作業がかなり合理化されたこと、である。正直なところ、学生バイトの皆さんには足を向けて寝られないほど感謝している（大袈裟）。最後にもうひとつ。こうして実際の作業を通して図書館と関わりを持った学生たちが、利用者として将来良い種を播かないか、という期待もある。今のところはっきりしたことは言えないが、特に1回生からバイトに志願した学生の行く末が楽しみである。